

原子力のタブーを打破しよう

△余滴1▽

原子力のタブーを打破しよう

村田 光 平

今、日本社会は、不況や北朝鮮問題などに目を奪われ、はるかに悲惨な「日本の破滅」が現実になりつつあることを知らずにいます。

それは、いったん起こってしまえば鎮圧不可能で、何百万何千万人に被害を及ぼし、しかも幾世代にも及ぶ大災害となり得るもの、つまり「原発大事故」の発生です。しかし、タブーの存在により、国民はそれを知ることが妨げられております。

私は一年ほど前に、一九七三年に欧米で大問題となった製法による原発が、日本では十基余りもそのまま運転されている可能性があるとの情報を得ました。

この製法によれば、原発の核心部分である圧力容器に毛状の亀裂が無数に生ずることです。何人かの報道関係者がこれを記事にすることを試みましたが、取材活動は中断されました。タブーの故なのでしょう。しかし、今年八月八日発売の「週刊金曜日」は遂にスクープ記事としてこれを報ずるに至りました。政府は徹底的な説明を行う義務があります。

わが国の原子力政策は、次の通り国民の生命の安全を脅かすものとなっております。転換が求められます。①マグニチュード8クラスの大地震の発生が予測されている東海地方のど真ん中に四基の浜岡原発が存在する。②最悪の場合、世界の人口の半分近くの犠牲者を生む可能性のある六ヶ所村の再処理工場で、最近三百ヶ所余りの不正溶接が発見

された。③六ヶ所村は、ノーベル物理学賞受賞者の小柴昌俊氏が、その危険性から「絶対反対」との立場をとる、国際熱核融合装置の誘致を決めている。

私は今年八月、以上の趣旨を盛り込んだ書簡を各方面に発出したところ、心強い反響を得ています。九月十日には静岡県庁で記者会見を求められましたが、翌十一日付の中日新聞は会見の写真入りで「原発震災」に備えた防災訓練をすべきであるとの私の訴えを大きく報じました。この記者会見の様子は、朝日、静岡新聞などでも同日に報じられ、タブー破りの成果はあがっています。

私は今後とも原子力の危険性に関する「恐るべき沈黙と無関心」を揺さぶり続ける所存です。

何卒、日本のため、未来の世代のため、そして人類のため御尽力をお願い申し上げます。

(本学教授)

△余滴2▽

『恋路ゆかしき大将』巻五の筆者

宮田 光

『恋路ゆかしき大将』は、鎌倉時代末期の成立と思われる中世王朝物語である。伝本は九条家旧蔵本(巻一〜巻四)と宮内庁書陵部蔵本(巻五)の二冊のみである。

九条家旧蔵本は、金子武雄氏により、『我身にたどる姫君』と共に国文学研究資料館に寄託されている。この二冊は同筆、同体裁である

が、最近、池田利夫氏により、国文学研究資料館蔵・初雁文庫旧蔵の『とりかへばや』四冊も同筆であることが報告されている。この他にも同筆のものがありそうであるが、今のところ、筆者は不明である。

宮内庁書陵部蔵本（桂宮本）は改装本である。袋綴。縦三一・ハセンチ、横二二・二センチ。原本の裏表紙一丁・包み紙二丁・遊紙（？）一丁が綴じ込んである。原本裏表紙は藍色雲形模様、縦一三・二センチ、横二〇・ハセンチ以上。改装前のこの本の保存の状況は甚だ乱雑であり、虫損の位置を調べてみると、特に前半は、丁の順序は乱れ、各丁の幅も揃えず、上下逆に重ねた丁もあるまま包まれていたと思われる。巻五の錯簡については、ほぼ解決していると思われるので、ここでは触れない。ここでは、改装本に綴じ込まれた、本来の包紙から推察できることについて述べておく。

「モトノ包紙（智仁親王^{（不明）}□□紙反古）」と注記された奉書紙は二枚とも中央に横の折り目があり、一枚には「大聖寺コカン御筆 双子キレトモアリ」と書かれ（図1）、一枚には「けふはまた春のうちとや 時鳥しのひ音なから」と詠みさした和歌が書いてある。桂宮本叢書の解説によれば、桂宮家の祖である八条宮智仁親王の筆跡とのことである。昨夏、たまたま智仁親王筆の書状を見る機会があった。反古紙の筆跡とよく似ていると思った。桂宮本でもあり、この文字が智仁親王の筆跡である可能性は高い。

大聖寺コカン御筆
なまきり（？）

（図1）

『恋路ゆかしき大将』巻五の筆者

この包紙に記されている「大聖寺」は、現在は京都市上京区御所八幡町にある。光厳天皇妃の無相定円禪尼を開基とする臨濟宗の尼寺で、正親町天皇の皇女の入室にあたり尼寺第一位とする論旨の下された門跡寺という（『平安通志』による）。『本朝皇胤紹運録』によれば、この頃、後柏原院・後奈良院・陽光院（誠仁親王）・後陽成院など、歴代の天皇の皇女が大聖寺に入室している。智仁親王は、正親町天皇の皇子の誠仁親王（陽光院・贈太上天皇）の皇子であり、大聖寺との間に親しい交流があった可能性は高い。巻五の筆者である「コカン」の筆跡を知っていたということであろう。

「コカン」は誰だろうか。大聖寺を訪れてお尋ねしたところ、第六世古鑑光院宮覚鎮尼であろうとのご教示をいただいた。「後柏原院皇女 御母准三后藤子^{勅修寺贈左大臣秀}女」 天文十九庚戌九月廿六日薨去」と大聖寺の寺録にある。

また、古筆切の資料には「^{また}双子切」は見当たらなかった。「双子キレトモアリ」は、「草子切れどもあり」と読むのであろう。包紙に智仁親王筆で「大聖寺の古鑑光院宮覚鎮尼の御筆の物語の断片がこの中に入っている」と書かれていたとすれば、信憑性の高い内容である。古鑑光院宮覚鎮尼の薨じた天文十九年（1550）から智仁親王（天正七年1579）嘉永六年（1803）まではそんなに離れてはいない。

『恋路ゆかしき大将』の巻五を写した丁寧な細字は、古鑑光院宮覚鎮尼と推定してよさそうである。

最後に、『本朝皇胤紹運録』から関連する系図を引いておく。

中国の詩の翻訳について

百五

百六

後柏原院

後奈良院

母准三后藤子。贈左大臣教秀公女。号豊樂門院
皇女「比丘尼。大聖寺。諱覺チン。母同今上」

百七

正親町院—陽光院「諱誠仁」

百八

後陽成院

母新上東門院。贈左大臣晴秀公女。

皇女「大聖寺喝食。早世」

知仁親王「一品。式部卿。八條殿。
寛永六四七薨。母同。」

皇女「大聖寺。早世。十二歳。
母同」後陽成」

注1、「祖形本『浜松中納言物語』の写し手は誰——『とりかへばや』

と『恋路ゆかしき大将』と」（池田利夫・『鶴見大学紀要』国語国
文学篇・38巻11号・二〇〇一年）

注2、「恋路ゆかしき大将物語」（小木喬『鎌倉時代物語の研究』所収・

東宝書房・昭和36年11月）

『恋路ゆかしき大将』末巻」（『物語文学論考』所収・教育出版

センター・昭和46年10月）

『恋路ゆかしき大将』考——付、桂宮本の欠落部分について」

（宮田光・『名古屋平安文学会報』6・昭和56年4月）

注3、「恋路ゆかしき大将」（『桂宮本叢書』第十六巻）・養徳社・昭和35年2月

（本学教授）

△余滴3V

中国の詩の翻訳について

漢詩和訳——たとえば白樂天の場合——

西村 富美子

今から二十五年ほど前に、かな書きによる白樂天の詩の訳詩集が、
武部利男氏により六興出版から出版されたことがあり（一九八一年一
月）、筆者はその書評を『中国文学報』に載せたことがあった。この
訳詩集には一二四篇の詩を収めるが、武部氏にはこれ以前に東京創元
社から出された訳詩集があり（一九五七年八月）、それには二篇の
詩を収める（仮に前者を新版、後者を旧版と呼ぶ）。旧版所収の詩は
すべて新版に収録されており、これらの詩の訳は、一、二篇を除いて
は、かつて雑誌『V I K I N G』に連載されたものを再編し一冊の書
として刊行したものである。旧版を出したとき、同人たちから「タケ
ベ譯スタイル」また「タケベサク」と評されたが、その後二十年ほど
は一篇の訳詩も発表していない。もともとは、原詩も無く、注も皆無
に近い、このひらがな譯の漢詩の訳詩は、同人たちの間でかなり物議
を醸したらしい。旧版以後二十年の沈黙は、漢詩の翻訳についての再
思考の時期であったようで、二篇ほどの文章にまとめられているが、
漢詩の翻訳についての理論的解明としては極めて早期に属するもので
ある。訳詩再開後も、訳詩の方法は依然として変わらず、百篇ほどを
追譯し、新版『白樂天詩集』としてまとめられた。

武部氏の著書の書評をしたのは、当時から白居易を研究対象の一つ
としていたからでもあるが、ひらがな訳という漢詩の翻訳方法に非常